

曲目解説

Andante

アンダンテ

Johann Sebastian Bach（1685–1750）　ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

曲目解説

Andante アンダンテ

Sonata No. 2 in a minor for Solo Violin, BWV 1003 ／ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ短調 より 第3楽章

Johann Sebastian Bach（1685–1750） ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

作曲	1720年までに（ケーテン時代）
原曲の編成	ヴァイオリン1本（無伴奏）
調・拍子	ハ長調・4分の3拍子
この楽譜	Mutopia Project の楽譜の、旋律の声部に篠笛の運指を付記

作曲者

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、ドイツ中部のアイゼナハに、代々音楽家を出した家に生まれました。
ヴァイマルの宮廷オルガニスト、ケーテンの宮廷楽長を経て、
1723年からはライプツィヒの聖トーマス教会のカントル（音楽監督）を務め、その地で生涯を終えました。

ケーテンの宮廷（1717〜23年）は、礼拝に手の込んだ音楽を用いない改革派の宮廷だったため、
バッハはこの時期、器楽曲に力を注ぎました。無伴奏ヴァイオリンや無伴奏チェロのための曲、
『ブランデンブルク協奏曲』、『平均律クラヴィーア曲集』第1巻などは、この時期に生まれています。

生前は、作曲家としてよりも、オルガンの名手として知られていました。没後はしばらく忘れられましたが、
1829年にメンデルスゾーンが『マタイ受難曲』を蘇演したことをきっかけに、19世紀に再評価が進みました。

曲の成り立ち

1720年にケーテンで清書された自筆譜『伴奏の低音なしの、ヴァイオリンのための6つの独奏曲』（Sei Solo à Violino senza Basso accompagnato）に収められた曲です。ソナタ3曲とパルティータ3曲が交互に並び、
重音や分散和音を使って、1本のヴァイオリンで旋律と和声の両方を表すように書かれています。

ソナタは「教会ソナタ」の型にならい、遅い・速い・遅い・速いの4つの楽章でできています。第2番は、
グラーヴェ、フーガ、アンダンテ、アレグロの順で、このアンダンテは3番目の、ゆったりした楽章です。

曲調と聴きどころ

イ短調のソナタの中で、この楽章だけが、平行調のハ長調で書かれています。
厳しく入り組んだフーガのあとに、ほっと明るい光が差すように始まります。

ヴァイオリンは1本ですが、上の声部で長く歌う旋律と、下の声部で一定の8分音符を刻む伴奏とを、
同時に弾くように書かれています。低音の伴奏にのって、独唱者がアリアを歌う姿を、1人で表しているのです。

旋律は、長くのばす音と、細かく飾る音とが交互に現れます。のばしている間にも、
下の伴奏が刻み続けるので、時間が静かに流れていく感じがします。前半と後半を、
それぞれくり返す二部形式です。

笛では伴奏の声部は吹けないので、この楽譜では、上の旋律の声部に運指を付けています。
下の8分音符の刻みを、心の中で感じながら吹くと、旋律の間（ま）が生きてきます。

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ハ長調

ドを主音とする長調で、調号はありません。イ短調のソナタの中で、この楽章だけが明るいハ長調です（平行調）。

拍子　4分の3拍子

1小節に4分音符が3つ。原曲では、下の声部が8分音符で刻み続けます。

歌と伴奏

原曲は1本のヴァイオリンで、旋律と伴奏を同時に弾きます。笛では旋律だけを吹くので、
心の中で8分音符の刻みを感じながら吹くと、のばす音がやせません。

篠笛の楽譜と調について

　同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ハ長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。変イ長調（原曲より長3度下）、チューナーの基準A＝431Hz（全体を45セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026